

社会人看護学生の学修過程の解明： 臨地実習を中心にして

メタデータ	言語: jpn 出版者: 公開日: 2019-10-31 キーワード (Ja): キーワード (En): 作成者: 伊東, 美智子 メールアドレス: 所属:
URL	https://kobe-tokiwa.repo.nii.ac.jp/records/1077

3-P-9

社会人看護学生の学修過程の解明—臨地実習を中心にして—

伊東美智子¹⁾

【背景・目的】社会人経験後に看護専門学校に入学する人（以下、社会人学生）の数は今や4人に1人である。Knowles（2001）は、「社会人の強みは豊かな経験にあり、学習資源になる」と言う。しかし看護師養成では、「経験があるゆえに教員からの指導を受け入れにくい（藤田,2014）」など、困難を覚える社会人学生は少なくない。そこで、社会人学生の学修過程を臨地実習に特化して明らかにすることを試みた。【方法】協力者は、現役社会人学生9名と卒業後2～4年の現役社会人看護師9名である。主な聴き取り内容は、入学までの経験の中で修得してきた知識（以下、経験知）と、新しく学ぶ看護とを統合する上での難しさや工夫についてである。それらを、質的研究法である複線径路等至性モデリングと発生論の3層モデルを用いて分析した。【結果・考察】特に前職が介護職や看護助手であると、学校入学直後に教員から「介護と看護は違うから一緒にしないで」と、釘を刺された。しかし実習に入ると、特に妊娠・出産、子育てや保育経験については、寧ろ経験知を活かすことを期待された。実際にそれを活かして実習を乗り切ると自己肯定感が高まった。一方、患者から受け持ちは拒否された場面を振り返ることで、患者に向かう自分の姿勢に気付かされ、変えていった。このような過程を経て社会人学生は、経験知の活かし方や見直すべき点に気付き、看護師らしい振る舞いを体得していった。

1) 保健科学部看護学科